

第 36 回東京医科大学医科学フォーラム
The 36th Medical Science Forum (MSF)

天 野 景 裕¹⁾ 宮 澤 啓 介²⁾

Kagehiro AMANO¹⁾, Keisuke MIYAZAWA²⁾

オーガナイザー

¹⁾東京医科大学臨床検査医学講座

²⁾東京医科大学学生化学講座

2011年10月26日(水)午後6時より、大学病院教育棟5階講堂において、第36回東京医科大学・医科学フォーラムが開催された。今回は、本学神経生理学講座准教授の八谷如美先生による「神経変性疾患におけるタンパク質異常凝集の関与と制御—病態解明と治療への挑戦—」というタイトルでご講演いただいた。参加者が100名以上にのぼる盛況な講演会となり、特に本学医学部学生達(M1~M5)の参加者が多かった。

タンパク質は正しい高次構造をとることができてはじめて“正しく機能”する。八谷先生のご講演は、細胞内微細構造や各小器官の鮮明な電顕写真と細胞内タンパク質合成過程におけるタンパク高次構造形成(folding)や細胞内輸送に関する動画を駆使した導入部から始まり、次第にプリオン病を中心とする

神経変性疾患の病態解明へと明解な解説が進んだ。特に後半部の *in vitro* においてタンパク質の高次構造を解きほぐす(unfolding)新規分子シャペロン“アンフォールジン(Unfoldin)”の発見・精製の経緯とその機能解析のお話は圧巻であった。この“アンフォールジン”は基質特異性なしにこれまでにないほど高いunfolding活性を有し、これを用いることによって神経変性疾患等にみられる細胞内タンパク凝集体の質量分析の解析精度は飛躍的に改善する。今後、プリオン病、パーキンソン病、アルツハイマー病等の神経変性疾患への病態解明や治療法開発への応用が見込まれる可能性に富んだ研究成果と拝察する。

90分にも及ぶご講演であったが、参加者一同はその名講義に息をのんで聴き入っていた。講演終了後は多くの参加者より長時間にわたり活発な質疑応答が行われたが、特に学生達から多くの質問があったのは印象的であった。最後に素晴らしい研究業績に対して八谷先生ならびに教室員全員の方々に称賛の拍手が送られた。本学の基礎医学研究の質の高さを再認識する機会となったと同時に、参加者一同のリサーチマインドを大いに刺激する医科学フォーラムとなった。

(文責 宮澤啓介)

